

1:25,000

都市圏活断層図

Active Fault Map in Urban Area

熊本

KUMAMOTO

活断層調査：池田安隆^{*1}，千田昇^{*2}，中田高^{*3}，
金田平太郎^{*4}，田力正好^{*1}，高沢信司^{*5}

国土地理院

Geographical Survey Institute

*1 東京大学，*2 大分大学，*3 広島大学，*4 京都大学，*5 国土地理院

1:25,000 都市圏活断層図

熊本 KUMAMOTO

記号 Legend

活断層 Active Fault Trace		最近数十万年間に、概ね千年から数万年の周期で繰り返し動いてきた跡が地形に現れ、今後も活動を繰り返すと考えられる断層。明瞭な地形的証拠から位置が特定できるもの。
活断層(位置やや不明確) Active Fault Trace (site indistinct)		活断層のうち、活動の痕跡が侵食や人工的な要因等によって改変されているために、その位置が明確には特定できないもの。
活断層(活撓曲) Active Flexure		活断層のうち、変位が軟らかい地層内で拡散し、地表には段差ではなくたわみとして現れたもの。たわみの範囲及び傾斜方向を示す。
活断層(伏在部) Active Fault Trace (concealed)		活断層のうち、最新の活動時以後の地層で覆われ、変位を示す地形が直接現れていない部分。
横ずれ Strike Slip		活断層の相対的な水平方向の変位の向きを矢印で示す。
縦ずれ Dip Slip		活断層の上下方向の変位の向き。相対的に低下している側に短線を付す。
地震断層 Earthquake Fault		地震発生の際に変位したことが明らかになっている活断層。この図においては、明治時代以降の地震で観察されたものに限って図示。
トレンチ調査地点 Trench Survey Site		活断層の通過地点に調査溝(トレンチ)を掘り、断層運動の解読調査を行った地点。(これまでに各種調査研究機関等によって調査が実施されたもの)
活断層の名称 Name of Active Fault	野島断層(例)	活断層の固有名称。
推定活断層(地表) Presumed Active Fault		地形的な特徴により、活断層の存在が推定されるが、現時点では明確に特定できないもの。または、今後も活動を繰り返すかどうか不明なもの。
推定活断層(地下) Presumed Active Fault (by prospecting data)		新しい地層に覆われて、断層地形が地表で確認されていないが、既往のボーリングや物理探査によりその存在が推定された活断層。
活褶曲 Active Fold		現在も続いている地殻変動により生じている波状地形。凸部または凹部を連ねた線で図示。
地形面の傾動方向 Tilting Surface Direction		地形面が、現在も続いている地殻変動によって傾いている場所。最大傾斜方向で図示。
上位段丘面 Higher Terrace		海または河川の作用で形成された平坦地が、約数十万年前に陸化した台地面。
中位段丘面 Middle Terrace		海または河川の作用で形成された平坦地が、約十万～数千年前に陸化した台地面。
下位段丘面 Lower Terrace		海または河川の作用で形成された平坦地が、約数万～数千年前に陸化した台地面。
沖積低地 Alluvial Lowland		数千年前から歴史時代にかけて、海または河川の作用で形成された平坦地。地下に未発見の断層が存在する可能性もある。
扇状地 Fan		河川によって形成された、谷口を頂点とし平地に向かって扇状に開く半円錐の地形。地下に未発見の断層が存在する可能性もある。
埋立地・干拓地 Reclaimed Land		浅い内湾や低湿地などに埋め立てや排水を施して造り出した新たな陸地。この図においては、主に明治時代以降に造成された範囲を図示。地下に未発見の断層が存在する可能性もある。
地すべり Landslide		斜面を構成する岩石・土壌などの一部が斜面下方に移動している場所。滑落崖と移動土塊の範囲を図示。
変位した谷線 Offset Channel		断層の横ずれ活動により変位した谷線。
火口・カルデラ Crater・Caldera		火山地におけるほぼ円形の凹地形。外縁線を図示
火砕流堆積面 Surface of Pyroclastic Flow Deposit		噴火時に、火山灰・軽石や溶岩片と火山ガスとの混合物が流下して堆積した平坦地。

図法・資料等

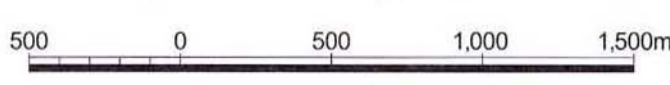
- 投影はユニバーサル横メルカトル図法
- 高さの基準は東京湾の平均海面
- 等高線の間隔は10メートル
- 使用した基図は1:25,000地形図
平成10年修 正「熊本」 平成10年修 正「健軍」
平成6年修 正「大矢野原」 平成8年部分修正「宇土」
平成6年修 正「御船」 平成6年修 正「浜町」
- 参考資料
1) 九州活構造研究会(1989):九州の活構造, 東京大学出版会, 553p.
2) 熊本県(1983):土地分類基本調査「御船」(1/5万).
3) 熊本県(1997):平成8年度地震関係基礎調査研究交付金「布田川断層帯(立田山断層を含む)に関する調査」成果報告書.
4) 経済企画庁・熊本県(1958):土地分類基本調査「熊本」(1/5万).
5) 下川浩一・衣笠善博(1999):日奈久断層系の活動履歴及び活動性調査, 地質調査所速報 no.EQ/99/3, 平成10年度活断層・古地震研究調査概要報告書, 253-262.
6) 千田昇;岡田篤正/千田昇・岡田篤正(1991):「新編 日本の活断層一分布図と資料一」, 熊本, 東京大学出版会, 358-363.
7) トレンチ位置については、熊本県(1997)および地質調査所の資料による。

利用上の注意

- この図の特徴
この都市圏活断層図は、陸部の活断層の位置に関する最新の調査成果に、地形分類を加えて作成しました。
- 活断層とその区分
この図における「活断層」とは、最近数十万年間に約千年から数万年の間隔で繰り返し活動してきた跡が地形に明瞭に表れており、今後も活動を繰り返すと考えられるものをいいます。このうち、風雨による侵食や堆積、また開発の影響などで活断層の位置を明確に表示できない区間は破線で、活動の跡が土砂の下に埋もれてしまっている区間は点線で示しています。
また、活断層の可能性のある地形であるが活断層以外の原因でできたとも説明できるもの、または、今後も活動を繰り返すかどうか明確に判断ができなかったもの、あるいは、他の調査結果から地下に活断層の存在が推定されたものは「推定活断層」として表記しました。
- 未知の活断層の可能性
この図で緑色で示されている地域(扇状地、沖積低地、または埋立地・干拓地と示されている所)は、川が運んできた土砂などによって最近数千年間に形成された土地です。ここでは今回の調査で確認できなかった未知の活断層が埋もれている可能性も残されています。
- この図から把握できることの限界
この図では、それぞれの活断層が過去にいつ動いたのかは調べていません。従って、それぞれの活断層がいつ動くか、言い換えれば、この次地震が起こるのはいつなのかについては、この図からはわかりません。
一般に、活断層が過去にいつ動いたかは、活断層が通っている位置の地面を掘り下げて調査することによってある程度調べることができます。しかし、現在の科学水準では、活断層がいつ動くかについて言い当てることは、大変難しいのです。
- この図を引用する場合の記載例
池田安隆・千田昇・中田高・金田平太郎・田力正好・高沢信司(2001):1:25,000都市圏活断層図「熊本」, 国土地理院技術資料D・1-No.388.

1:25,000

熊本



平成12年調査・編集
平成13年12月発行
著作権所有

国土地理院
(株)日本測量協会
(財)日本地図センター

5色刷 許可なく複製を禁ずる
郵便番号305-0811 茨城県つくば市北郷1番
電話 0298(64)1111(代表)

資料調製 発行 者
〒112-0002 東京都文京区小石川1-3-4 03(3815)5751
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 03(3485)5414